

---

# 押し掛け弟子ですが、何か？

悠梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

押し掛け弟子ですが、何か？

### 【Nコード】

N7336L

### 【作者名】

悠梨

### 【あらすじ】

「ではありません」シリーズから派生した話。

『魔女』ルカ・フォルトの弟子になりたいと志願する子供。それに対して、ルカの出した結論は……。

## その1

そつえば、そんなこともあったなと。

ルカ・フォルトにとってはその程度のうつすらとした記憶に過ぎない出来事だが、相手にとってはそれどころの騒ぎでは無かったらしい。

まあ彼女にとつては、そういったことすらも良くあることの一つであり、このこともまた幾許か時が経てば「うつすらとした記憶」になつてしまふのだろう。

……長く生きるといふことは、そういうことである。

「だーかーらー、私は弟子は取らないの」

しつこくしつこく付きまとつて来るその子供を振り向きもせず、早足で宿屋へ向かいながら言う。よくあることなのだが、正直ウンザリだ。

両腕には図書館で借りてきた本。一刻も早く、それらに目を通したいというのに。

「そんなこと言わずに、お願いします！ 何でもします、何でもしますから！」

子供の言葉に、ルカはびたりと足を止めた。宿屋はもう目と鼻の先だ。思わず長くため息をついて、意識的に笑顔を作つて振り返る。それはもう輝かんばかりの笑顔であるはずだ。

「じゃあ、死んでくれる？」

「……えっ？」

子供の顔色が、分かりやすいほどに変わる。根が素直な子供の心を傷つけるのは少し気が引けるのだが、手っ取り早くお引取り願うには、自分が『悪い人』だと認識されるのが一番お手軽だ。

「何でもしてくれるんでしょ？ じゃあ一度死んできてよ。そしてら弟子にしてあげる」

「……」

子供は黙って俯いた。何と返していいか思案に暮れてるらしい。金髪からのぞく大きな耳は、同属であるエルフの証。来ている洋服はボロボロで、裸足の左足には金のアンクレット 『奴隷』である……ということか。

ここまで子供一人で、必死に生き抜いてきたのだらうと推測される。少しばかり良心が痛んだが、子供を連れ歩く余裕は自分には無い。ましてや弟子などと。自分と居るより、たとえ奴隷身分であろうとも、町で暮らして行くほうが遥かにマトモな生き方が出来るというものだ。

ずっと探していたのだ、と。子供はそう言った。

一年ほど前に、小さな町に立ち寄ったことがある。その町には何年か前にも立ち寄ったことがあり、ルカは気に入っていた。

農業と商業の盛んな、観光名所にもなっている緑の美しい町 だつたはずだ。

彼女が訪れる数年前から日照りが続いたために、町は様相を変えていた。

郊外にあった緑豊かな田畑や果樹園は見る影も無く、町の真ん中を流れる川は干上がって僅かばかりの水が流れているに過ぎない。町の名物だった大水車は、動きを止めて久しい。

……町の蓄えは、とうに尽きていた。

商人たちは、外から食料品を仕入れ、市場では高値で売りさばいた。

一部の富裕層はそれでも何とか生きていくことが出来たが、一般の人々は貧窮した。

治安は悪化し、ストリートチルドレンが路上に溢れる。強盗・夜盗・スリが頻発し、観光客は寄り付かなくなり、町の状態は一層ひどくなる。

中央政府から派遣された貴族は、汚職まみれ。

結成された自警団は、崩壊寸前。

そんな状態の町に彼女が訪れたのは、『魔女』としての責務を果たすためであった。

路銀に不自由は無かったのだが、あえて宿泊した安価な宿で、その子供は雇われて働いていたらしい。観光客の寝てる隙にお金を奪うために。

## その2

子供がルカ・フォルトの懷を狙ったのは、その宿に滞在して三日目の晩、新月の夜とのこと……だったそうだ。

「だったそうだ」というのは、ルカ自身の記憶があまりにも曖昧だからである。当事者であつたらしい目の前の子供が言うのだから、多分そうなのだろう。

一所に長く滞在することの無い生活が続けているせいか、はたまたそれこそ歳を重ねすぎてボケでもきたのか、ルカの記憶力はあまり良くは無い。

その割りに必要な知識であれば、本の一冊や二冊は軽く読んで覚えこんでしまうのだから、恐らく単純に興味の無いことやインパクトの薄い出来事は記憶には残らないのだろう。

月の出ない、暗い晩だった。

というか月が出ないからこそ、犯罪を犯すのにはもってこいだったというべきか。

宿泊客が抵抗した時のために、片手に子供の手には大きすぎる刃物を持ち、黒い服を着て、布で顔を隠す。

最悪の場合、客を殺すつもりだった。でないと、盗み損ねた自分が宿の主人に殺されるのは分かりきっている。

そつなるよりも泣き落として、子供に過ぎない自分の哀れな身の上話を聴いた愚かで多少なりとも裕福な宿泊客が、同情してわずかなからお金を分けてくれることを祈る。

……今のところは幸いなことに、盗みに失敗したことも、最悪の場合に陥ったことも、子供であることを最大限に利用して情けを請う

たことも無い。

今回の客は、ちらりと見た感じはただの小娘だった。ちよろい、はず。

足音と気配を断って客の眠る部屋の前へと立ち、そつと扉に鍵を差し込む。カチャリ、と硬質な音がささやかに響いた。

音を立てずに扉を開き、わずかな隙間から中をうかがう。

ざつと走らせた視線の中、客の荷物は簡素な備え付けの小机の上に無造作に置かれていた。まるで盗って下さいと言わんばかりの無防備さで。

しかし肝心の客の方はいえ、全く無防備とはいえなかった。本来ならば、小さく寂れた固いベッドの上で毛布に包まっているはずの人影はしかし、部屋の中央で立ち尽くしていた。

チェックインした時には目深にフードを被っていたので気がつかなかったが、女は腰まである真っ直ぐな、見事な銀色の髪をしていた。大きく尖った耳は、自分と同じエルフ族である証。

瞼は伏せられていて、その瞼を縁取る長い睫毛も、わずかな隙間から見える瞳の色も、髪と同じ冴え冴えとした銀の色。

微動だにしないその顔は、まるで彫像か何かのように深く、遠い。月も無いはずの暗闇の中に、それらは淡く発光しているように子供には見えた。

いや……しているようにではなく、実際に何かの光を弾いていると気づいた時には、思わず扉を開け放ってしまった。

女の足元には、部屋の床いっぱいに広がって光る魔法陣。そこから漏れる光が女の髪や瞳に反射してキラキラと輝いている。

その足元の魔法陣に、子供の視線は吸い寄せられた。それには、確かに見覚えがある。とてもとても、懐かしい記憶。

「

」

女の唇が、僅かに動いて何かを囁いた。足元の美しい魔法陣が強い光を発して、強烈な残像を残して消える。

と、女の足元がふらりとよろめいた。気づいた時には、子供は駆け寄って彼女を支えていた

「うあああ……も、ホント疲れたあ……」

よろよろと子供の手を借りて、冷えて固いベッドに腰を下ろしたエルフの女は、こめかみに手をやってしばらく目を閉じていた。ふいふいと長くため息をついて、ゆっくりと目を見開く。そこで初めて子供は女と視線が合ったのを感じた。

真っ直ぐと子供を見据えた女は、首をかしげて開口一番、

「えーと、誰？ 泥棒??」

しまった、今は事中だったのだ。すっかり失念していた！ そう思い至り、慌てて右手に握った刃物を女の首筋へと突きつけようとして

気がつけば、腕を背中の方へとひねり上げられて床にうつぶせにされていた。刃物は取り上げられ、逆に自分の首筋へと冷たく当たっている。

背筋に一筋、冷たい汗が流れた。ここまでか。このまま自警団にでも突き出されてしまえば、間違いなく自分は死罪だ。

しかし頭上から降ってくる声は子供の悲愴な覚悟を裏切る、至って緊張感の無いものだった。

「あなたさっきの、見ちゃった?」

「……へ?」

女の問いの意味が読めず、思わず問い返す。

「だから、あの魔法陣。見ちゃったの?」

言われて、先ほどの光景を思い起こす。美しくも、非現実的な光景だった。足元の魔法陣は、確かに目に焼きついて離れない。

だからこくりと首を縦に降ると、あちゃあ、と女が額に手を当てた。同時に、あっさりと背中からの重圧が消える。



困惑しながら身を起こすと、どさりと目の前にお金の入った袋が投げ出された。

両掌いっぱい分。中身は 金貨と銀貨。

どうして良いか分からずに女へ視線で問い質すと、女は既にベッドの中に入ろうとしていた。

「それ、口止め料よ。それでさっきのは忘れて、子供はもう寝なさい……私ももう、寝る、わ……」

もごもごと呟くように言うが早い、部屋にはすうすうと寝息が響いている。

暗闇に戻った部屋に残されたのは、床に投げ出された凶器と、あっけにとられて立ち尽くす子供、そしてその手の中の『口止め料』だけであった

### その3

「分かりました 死にます」

「そうそう、『何でもする』なんて言葉は、そう簡単に使っちゃダメだよー……って……ん??」

あやふやな記憶を無理矢理ひねり出そうとしていたためだろうか、子供の返事が自分の予測とはまるで異なったものに聞こえたのは。

ん、今何て言った? えーと、シニマス? 42マス?

HAHAHA まさか、そんな。違うよね? 「アキラメマス」か  
「それはできません」の聞き間違いだよね??

ぼんやりと子供の言葉を頭の中で反芻し、

「いやいやいや、そんな、ねえ?」

と一人で否定して首を振る。この歳になってこんなに動揺することになるうとは、思っても見なかった。

先ほどよりは少し引きつり気味の笑顔を、「ニツコリ」という擬態語つきでもう一度子供に向け、問い返してみる。

「えーと、ごめん。その、何て言ったのかな? もう一度言ってもらっても」

「死にます。弟子にとってももらえないなら、生きていても仕方ないから」

ビシリ。別段ファンデーションも塗っていないというのに、顔面にヒビが入った ような気がした。

一体どこまで本気なのかと、子供の表情をうかがおうとするが、伸び放題の前髪に隠されて見えない。

かすかに見えるカサついた口元には、何の表情も見えず。

……そしておそらく、そうやってうつむいていた子供にもルカ・フ

オルトの表情が変わったのは見えなかったであろう。

すうつ　と、銀色の瞳が細められ、瞳孔が音も無く開く。かつて誰かに、『絶対零度の氷山のようなね』と表されたことのある瞳（何と失礼な）。

その表現に違わず、直視した人間が思わず身震いでもするのではないか、というほどに冷え切った眼差しに、幸いというべきだろうか子供は全くといっていいほど気づいていない。

「……本気で言ってるの？」

問い返すのは、やや低めの声。

「本気、です」

「……」

思わず額に手を当てて空を仰いだ。ああ、何てことだろうか。

いつもより奮発してとった、居心地の良い宿屋は目と鼻の先なのに、一階の美味しい食堂でご飯を食べて（ここは焼き魚定食が最高に良い！）、お湯を借りて身体を綺麗にして、ふかふかベッドにゴロゴロ寝そべって、借りてきた本を読み漁る……そんな天にも昇るようなプライベートタイムが私を待っているというのに。

こんな子供のことなど、無視して部屋に戻ればいい。そうした後にもし、本当に子供が自分で命を絶ったとして、それは自分のせいなどではないことなど明らかだ。

これは面倒なことになった。何が面倒かって、自分の割り切れない心情である。

長い年月生きているからといって、人間そう簡単には変われないものなのかも知れない。

これが『優しさ』などという尊い感情などでは無いことは、自分で分かっている。

ただ自分の無力さと汚さを直視することに耐えられないだけ、なのだ。

冷たく冷たく、まっすぐ見るものを射る弓のように引き絞られていた瞳が緩み、元の温度を取り戻す。

変わりに宿したのは、諦観。

そしてやはり、そんなルカの様子にも気づかぬ子供は、顔を上げることなく尋ねてもいないのに話し始めた。

「誰もボクが死んで悲しむ人もいませんし、今のままでは生きていても、何の意味も無いんです。」

もし、ボクが死んでも貴方のせいでは無いので――

そこまで聞いて、イラっとした。つい言葉がこぼれる。

「そうやってワガママを言えば、私が折れるとでも？」

「――」

子供の顔が上がった。怒りに任せた反射だろう。それを気の無い目で眺めながら、『魔女』は呪文でも紡ぐように言葉を発する。

「だって、そうでしょう？ 貴方の言ってることは、ただの子供の駄々で脅迫よ。オトナを困らせて言うこと聞かそうとしてるだけ。」

『オマエが言うことを聞いてくれないのなら、オマエの言葉のせいで、ボクは死んでやるぞ！ 阻止したいのなら、ボクの言うことを聞いてくれ』って――

「ボクは、そんな――」

「そういう風に私には聞こえるの。それにね、貴方が死ぬからといって、私は止めないわよ。むしろ好都合よ。だって貴方――」

そこであえて言葉を止める。胸の中に残っていた息を一旦全部吐き出して、一言。

「あの魔法陣を見たんでしょう？」

## その4

その言葉の持つ意味や重さが分からないほど、自分は子供では無いつもりだった。

しかし、所詮そのつもりだっただけで、オマエはただの子供でしかない。そう突きつけられたようで腹が立った。

だが『魔女』の言うことはいちいち尤もで、自分は反論の言葉すら持ち合わせていない。

「別に、あの時のことは関係ありません。ボクは口止め料を貰い、忘れました」

「あら、現に覚えてるから私を探していたんでしょ？ 違う？」

「でも」

「私にとつては、貴方がアレを覚えて生きてる時点で不安だし、不都合なのよ」

アレの意味が分かるうが分かるまいが、見てしまつて、覚えてるだけで。

腕を組んで、鼻からふん、と息を漏らしながら『魔女』は言う。

それならばいつそ、あの時自分を殺してくれていれば良かったのに。自分はきつと、殺されたとしても恨みもしなかった。

そう思っていたのが顔に出ていたのだろうか、彼女はさらに苛立ちを募らせたらしかった。

「あの時、貴方を殺すことも私には出来た。でも、何故それをしなかったか分かる？」

真つ直ぐに瞳を覗き込まれて、子供はたじろいた。少しずつ傾く日は既に昼の色では無くなつていて、それが女の銀色の瞳に映つて自分を射る……直視するには眩し過ぎた。

思わず目を逸らすと、女はそれを否定の返事と捉えたらしい。呆れたようなため息と共に、言葉は続いた。

「人殺しなんて、後味が悪いからに決まってるでしょう？　だからあの時は仕方なく取引として、貴方が一番必要としているものを与えて、私が一番必要としてる『口止め』をお願いしたの。」

取引をしたからといって、私の不安材料が全く無くなったわけでは無いけどね。

……同じように後味が悪くなるから、私の目の前に現れておきながら、私の目の届くところで

『言うこと聞いてもらえないから、生きてるのツマラナイので自分で勝手に死にます』

なんて、私は絶対に許さない。どんな手を使っても止めてやるから。

あ、でも貴方の言うこと聞いて、弟子にしてあげるつもりも無いからね。

死にたいのなら、私の居ないとき・居ない場所で、人のせいにしないで自分の意思で勝手に死んでちょうだい。

不安材料が無くなるのは好都合よ」

以上！　勝手に会話を切り上げると、女はサクサクと足を進めて宿屋の中へと姿を消した。

メチャクチャだ。メチャクチャ自分勝手な女だ。

だが、だからこそ納得してしまった。確かに、誰も好き好んで人殺しなんてしたくはないだろう。

目の前で自殺しようとする人間が居たら止めたいと思うのも道理だし、ましてやそれが自分と多少なりとも関わってしまった人間ならなお更のことだ。

そこには優しさだの同情だのという感情は一切含まれて居なくて、子供は何故か安心した。

切り捨てられたのでは無かった。見捨ててはもらえなかった。依存はさせてもらえなかった。だが

女は、自分を一人の人間として、対等に扱ってくれたのだ。

あの美しい魔法陣を目にすることの出来た晩の、明くる朝。

何年かぶりに振り出した大雨が、町を歓喜の渦に叩き込んだ。

三日三晩は降り続いたその雨のおかげで、干上がったいた河川には少しづつ水が戻り水車が動き始めた。

女はあの晩の翌朝には、素知らぬ顔でチェックアウトしていた。

子供は女に渡された金のうち半分を主人に上納し（それでもかなりの金額だった）、残りの半분을懐に隠し持ち、降り出した雨が四日目によりやく止むと、すぐに町を飛び出した。

何も考えてはいなかった。ただ何故か、女の後を追っていた。

親に捨てられ、宿屋の主人に拾われて悪事の片棒を担がされるようになってから、一度たりとも町を出たことも無かったので、旅慣れてなどいない。

しかも子供というだけで、危険な目にも沢山あったし、自分とは逆に旅慣れていた女の足跡を辿るのは容易では無かった。

途中何度か立ち寄った町で、子供でも出来るような簡単な仕事をし、て何とか路銀を繋ぎ、情報を集めて旅をする。

それがいつの間にか誰かに騙されて路銀を失い、人買いに捕まり、物好きな貴族にエルフというだけで買われ、まるで愛玩動物か何かのように飼い殺しにされた。悪趣味なことだ。

その生活には特に不自由も無かったのだが、それでも女を追いかけていたいという衝動は消えなかった。

隙を突いてそこから逃げ出した子供はあても無く放浪し、ゴミを漁って何とか生き延び、そうしてやっと今日、見知った人影が図書館から出てくるのを見つけたのだった。

女に会って直接話をするまで、自分が本当に何をしたかったのかは分からなかった。

だが何度も辛い目にあって「死んだ方がマシ」だと思ったのは嘘ではなかったし、かといって生半可な覚悟で女を追いかけたわけでも無かったことだけは確かだ。

ただあの美しい魔法陣が、自分の心を捉えて離さなかっただけで。

そう、だから。

（ボクは、そう簡単には諦めない）

それこそ死ぬ覚悟が出来るくらいには、本気なのだから。



## その5

そも、魔法とは何なのか。

もし誰かにそう尋ねられたら、ルカ・フォルトはこう答えることにしている。

「そうね、一種の学問であり言語みたいなものかしら」

だから一部の人間なら、努力と訓練次第で簡単なものなら使えるようになるでしょうね、と。

その『一部の人間』というのがどんな条件の人間なのか、というところまでは説明しないことにしてる。

説明しても混乱を来たすだけだと分かっているからだ。

最高に美味しい夕食と湯浴みの後に読んだ、図書館で借りてきた本。魔法についての記述には目新しいものは何も無かったが、既存の知識や技術を再確認したり他者（つまりは著者）の目線から再考するのにはとても有意義なものだった。

ご機嫌で床に着き、久々にふかふかの布団で睡眠を堪能し、朝の日差しに気持ちよく目覚めた。

朝食は綺麗に焼けたトーストと、ふわふわのスクランブルエッグとワインナー、そして絞ったオレンジジュース。やはり良い宿は朝食も美味い。

満ち足りた気分で図書館の開館時間までコーヒーをすすって時間をつぶし、宿屋を出た。

最高の気分は、唐突に終わりを告げた……図書館の前に、昨日の子供が仁王立ちしている。

無視して隣を通り過ぎようとして　本を手にしていなかった左手首を掴まれた。

「……弟子にして下さい」

……まったく。この子はこれ以外の言葉を知らないのではないかと思う。

振り解こうとして、出来なかった。仕方なく一旦視線を合わせ、意図的にキツク眉根を寄せてから答える。

「昨日ハッキリと断ったはずよ」

「ボクは、諦めると言った覚えはありません」

あちゃあ。思わずこめかみを押さえようとして、本が手にあるために出来なかった。仕方なく全身でため息をつく。このタイプはダメだ、話を通じる相手ではない。

「だーかーらー、私は絶対に貴方を弟子に取るつもりは無いって言ってるでしょ！」

「ボクだって、絶対に諦めるつもりは無いと言ってるんです」  
ほらやっぱり、話を通じない。

ニコリ。昨日とは逆に、子供の方から笑顔が返される。輝かんばかりの笑顔だが、何となく背筋に悪寒を感じてしまふ。そうか、自分が普段しているのはこういうことだったのか、などと今更気が着かされたが、それはそれである。

今考えるべきことは、どうやってこの子供に諦めさせて自分が逃げるか、である。

この分だと、昨日使った手は使わせてもらえそうに無い。

それならば、作戦2だ。

もう一度、わざと大げさなほどため息をついて肩をすくめてみせた。わかった、わかった、わかったからまずその手を離しなさい。そう言くと、あっさり子供の手が離れた。

握られていた手首を見ると、くつきりと痕がついている。それだけ子供の決意が固いのだということか。

ひとまず借りてきた本を返すために、図書館の中に入る。いちいち振り向くことはしなかったが、気配から察するに子供は後をピタリとついて来ているようだ。別に逃げ出すつもりは無いのだが。

「あ、ルカさんだ。おはようございます！ どうでした、その本？」  
「おはよ。うん、結構面白かったわ。新しいの、何か入ってる？」  
「残念、新書はいいの無いですねー」

すっかり顔見知りになった司書さんと、返却手続きをしながら雑談する。誰そのの書いたナント力な面白いだとか。幅広く色々な本を読んでいるこの司書の勧めてくれる本は、ジャンルを問わず中々ルカの好みにあっていた。

一通り手続きと雑談が終わると、子供を引き連れそのまま書架へと移動する。あちこちを回り、分厚い本を数冊ばかり手にすると、近くにある机についた。

後ろに棒立ちのままの子供をちよいちよいと手招きして隣に座らせると、持っていたカバンからこそごとと羽ペンと紙束を取り出す。そのうちの一枚にサラサラと数冊分の本のタイトルを書き付けて、本と一緒にずいといと子供の前に滑らせた。

ぽかん、と口を開けてこちらを見ている子供に、意地悪く笑ってみせる。

「まず、ここにある本全部。それからここにメモしておいた本全部。一人で読んで理解して、レポートにまとめて一週間以内に私のところに持ってきてなさい。それが出来たら、弟子にするの考えてあげてもいいわ」

まあ到底無理だろうけど、とは口にしない。

そもそも親に捨てられ、物盗りで奴隷だった子供が、文字の読み書きが出来るだなんて思っちゃいない。

もし文字の読み書きが出来たとしても与えた書物の内容は、一応初歩向けのものを選んだとは言え、魔法のマの字も何も知らない子供が一人で読んで理解できる様な生易しい内容のものでは無い。

つまりこれは、断るための口実づくりに過ぎない。

出来ないと分かり切っている課題をわざと与え、諦めさせるための。

## その6

しとしとと降る雨の音で、目が覚めた。こんな雨の日は、あの人のことを思い出す。

一週間は、思った以上にあっという間に過ぎた。

元よりこの街に来た理由は休息のためだ。好きなことだけして過ごす時間は、あっという間に過ぎ去るものである。

明日には宿をチェックアウトして、次の目的地へと旅立たなければならぬ。いい加減王都にある自宅へ戻り、息子の顔を見たいが、もう少しやるべきことが残っている。

この間やってきた遣いによれば、息子は健やかに成長しているとのことだった。

先日はウツカリと次世代の魔王と遭遇したとのことだが、あの賢い息子のことだから大丈夫だろう。

そういえば、あの子供。息子より少し年が上くらいだろうか。

窓から外をぼんやりと眺めながら思う。約束の期日は今日だ。図書館に行かなければ。

あれから自分は図書館には立ち寄っていなかったが、昨日の閉館直前に少しだけ顔を出して、例の馴染みの司書に様子を尋ねてみた。

子供は毎日図書館へと通い詰めていたそうだ。いつも同じ、一番奥にある席を陣取って、まるで壁か何かのように立ちはだかる本を相手に真剣な顔をして向き合っていたという。

あれだけの書物を目の前にして、全く諦めなかったというのは驚きだ。

毎朝開館時間と同時にやって来て、与えた課題本のうちの何冊かを借り午後三時には立ち去るらしい。図書館の閉館時間は午後5時だから、早めに退館するのには何か理由があるのだろうか。

どこに宿を取っているのかは分からないが、最初に来たときよりは身綺麗になっていたとのこと。子供でもできるような日雇い・あるいは住み込みの仕事でもしながら、空いた時間をみつけて通っているのでは無いかと司書は言った。

こんなナリではあるが、自分も一児の母であるために全く同情をしないというわけではない。

だがしかし、こんなナリだからこそ、ちょっと同情したくらいで自分の傍に置き、同じ道を歩ませるわけにもいかないとも思う。

そういえばあの日、あの人　師匠、先代の『魔女』は。

あの人は、どんな気持ちであの日、雨に打たれて死にかけていた自分を拾ったのだろう。

遠い日のことを思い出しかけて、やめた。分かるはずが無い、あの人は本当に掴み所の無い人だったのだから。

それほど多くは無い荷物をまとめ、スツカリお気に入りになった宿屋の朝食を美味しく頂いてコーヒーをすすり、宿屋をチェックアウトしてゆつくりと図書館へと向かった。傘を叩く雨はそれほど強くも無いが、止む気配は全く無い。しとしと、しとしと。

鬱陶しいようでもあり、優しく労わるようでもあり。

開館と同時に入った図書館に、いつもの司書の姿が無かった。ここ数日働き詰めだったため、有給をとったらしい。この街を発つ前に顔を見ておきたかったのだが、残念だ。

一番奥の席に、子供の姿はまだ無かった。諦めたのだろうか、と思いかけて首を振る。司書の話聞く限りでは、それはまず無いだろう。寝坊でもしてるだけかも知れない。

暇つぶしにと書架をうろつき、適当に選んだ本を手にもとる。東の国に関する本だった。旅をしていて偶然流れ着いた誰かが書いた

た日記を元に構成されている。

いずれ東の国にも行かなければなくなるだろう。読んでおいて損は無い。

と、これがまた中々面白い内容だったために時間を忘れて読みふけてしまい、トントンと肩を叩かれて我に返った。

振り返ると、目の下を青黒くした子供が分厚い紙の束を手にとっている。

壁にかかっている時計に目をやると、本を読み始めてからはまだそれほど時間が経っていなかったようだ。

「おはようございます」

眠たそうに目をこすりつつ、子供は律儀に挨拶をしてくる。この分だと徹夜でもしたのだろう。少しばかり不憫に思いつつ挨拶を返すと、子供は手にした紙束を両手で差し出してきた……かなりの厚さである。

まさか、本当にあれだけの本を全部読破した上で、レポートを作成したのだろうか。内心で相当驚きつつ、平静を装いながらそれを受け取った。

枚数もさることながら、字もかなり汚い。読めないことも無いが、時間はかかる。

「……あなた、字の読み書きは出来たの？」

「いいえ。なのでまず三日間は、文字や文章を覚えることに時間を費やしました」

「あーそー」

どうということもないフリで返事をしたが、内心舌を巻いていた。そこで諦めてしまうかと思ったら、まさか乗り越えてくるとは思っても見なかった。

しかも残りの四日間であれだけの本を読んだというのか。理解してるかどうかは……これからこのレポートを読めば分かることだが、それを抜きにしても大したものだ。

そこまでして作成されたレポートである。いくらル力が鬼ならぬ「悪ういオトナの『魔女』サマ」だからといって、目を通さないなんてことは絶対に出来ないし、半端な気持ちで向き合うことも出来ない。

この子供がどの程度まで理解できたのか、興味もあつた。

腹をくくり、少し湿っている紙束を整えなおすと振り向かずに子供に告げた。

「これ、ちょっと目を通すのに時間がかかりそうだから好きにしていいいわよ。そうね、図書館の閉館時間にまたここに来なさい」

これは中々、読み応えがありそうだ。

## その7

文字通りこの一週間は、死ぬ気で課題に取り組んだ……と子供は思う。

まず弟子入りを断られたその晩のうちに、短期の住み込みで働けるところを探す。やはりここは過去の経験を活かして、どこかの宿屋がいいだろう。下働きならお手の物だ。

……もちろん二度と窃盗には手を染めるつもりはない。あんな胸の悪くなるようなことをして食いつないでも、生きた心地がしない。

何軒か人手を募集しているところを見つけて当たり、多少誇張した身の上を話して雇用主を泣き落とした。まだまだオトナも捨てたモンじゃない。

図書館と仕事を往復しながらの生活は殆ど眠る時間なんて取れなかったし、まかないのご飯も喉を通らなかったから身体はキツかったけれども、こんなに充実した気持ちになったのは初めてだった。

正直ここまで自分が出来るとは、思っても見なかった。

よく考えてみれば、女が自分を突き放したのも当然である。自分はこれまで、自分の出来る最低限の努力もせずに他人に頼ろうとしていたのだから。

自分のレポートを読み始めた女を置いて図書館を後にした子供は、大きなため息をついた。内心ものすごく緊張している。膝が今にも笑い出しそうだ。

自分はベストを尽くしたつもりだが、もし女に認められなかったら弟子になれなかったら、この先自分はどうやって生きていこう。ここまで一度も、そういうことを考えたことが無かった。断られた時点で野垂れ死にでもするつもりでいたのだから。

でも自分の力で文字を読めるようになって、そして魔法の一端を学



んでみて、考え方は多少なりとも変わった気がする。少なくとも、今死んでしまうにはモッタイナイとを感じる程度には。

……逆に、もし仮に弟子に取ってもらえたとしたら？ 一体どんな生き方が出来るのだろうか。考えただけで胸が躍る。

三日かけて文字を覚えこんだ後に初めて魔法書を開き、辞書を片手に読み始めたときに走った震えを思い出す。こんなに面白い学問であり知識であり哲学は無いと思った。

とりあえず、もし断られたとしても路銀にはまだ多少余裕があるし、今は考える時間もある。

ひとまず屋台で食べ物でも調達して軽くつまみながら（緊張でそれほど食えることは出来ないかも知れない）、身体を少しでも休めておこう。

そう思いつつ、子供は中央広場へと足を向けた。傘なんて買うお金は無かったので、来た時と同じように建物の軒下から軒下へと小走りに走りながら移動する。

幸い雨は小降りになっていて、雲の間からうつすらと日も差している。午後には良い天気になるだろう。

それにしても、何かを待つだけの時間がこれほど長いものだとは思わなかった。

中央広場にたどり着く頃には、雨はスッカリと上がっていた。それまでまばらだった人通りも、天気がよくなるに連れて大分増えてきたようだ。

串に羊の肉を差し焼いたものを二本、それにオレンジジュースを奮発した子供は、近くにある教会の石段へと腰掛けた。それほどお腹は空いていないつもりだったが、良く焼けた肉の香りを嗅ぐと自然と少しは食欲が戻ってきた気がする。

図書館を出る間際に借りてきた魔法書を一冊斜め読みしながら、肉汁が本の上に滴らないよう気をつけて肉に噛み付く。

あの女は、自分のレポートを読んでどんな評価を下すのだろう。あのページのあの部分の記述は不味かったのではないか、とか、そういったことばかりが頭の中を掠めて、がじがじと噛んでいる肉の味が全くしない。読んでも本の内容も、当然のことながら頭には入ってこない。

それでも何とか二本とも食べ切り、オレンジジュースでそれらを喉の奥へと流し込んだ。ふと時計台を見上げる。約束の時間まで、まだあと5時間もある。

串を近くにあつたクズカゴへと捨てると、子供は立ち上がった。何も図書館の外ですつと時間を潰す必要も無いだろう。どうせなら自分も図書館の中で、女の返事を待っていよう。それなら本も読み放題だ。

文字が読めるというのは素晴らしいことだ。もし魔法を教えてもらうことが出来なかったとしても、自分は彼女に感謝していることには変わらない。

弟子にとつてもらえなかったとしても、今後自分だけである程度は魔法を使えるようになる自信はあるし、魔法書以外にも興味深い本は山ほど世の中に溢れている。それを知ることが出来た。

図書館に戻ると、女は相変わらず紙束と格闘していた。通りすがりの図書館の職員に尋ねると、昼食も摂らずにずっとああしていたらしい。

表情は真剣そのもので、片手にペンを握り、自分の書いたレポートに何事かを書き足しながら読み進めている。時折席を立つと、書架に移動して何かの本を手に取り参照し、また席に戻りレポートを読む。その繰り返し。

子供が戻ってきたことにも気づいた様子は無い。すごい集中力だ。その姿に触発されて、自分もたくさん本を読みたくなった。書架か

ら数冊の本を取り出し、女から大分離れた位置に陣取ると、まるで張り合うかのような勢いで本を読む。

トントン、と誰かに肩を叩かれ我にかえる頃には、すっかりと日が暮れていた。

## その8

ニツコリ。完璧なまでの笑顔で肩を叩いてきた女は、「閉館時間よ」とだけ言つて背を向けた。

話は図書館を出てからということだろうか。出口近くにあるカウンスターで図書館の職員と一言・二言会話すると、こちらを振り向きもせず歩いていく。

無言のまま図書館を後にして、無言のまま薄暗闇に沈む街を歩く。本当は早く「審査結果」なるものを聞きたいのだが、何となく口を開くのが憚られるような空気だ。

今更気がついたが、女は割と長身で背中がシャンと伸びていて、歩いていても軸がぶれない。腰までの銀髪が波打つのがきれいで、思わず何もかも忘れて見とれてみると、唐突に足を止めた……女が先日まで停泊していた宿屋の前だ。

フロントで顔見知りなのか、若い男性と話をして何度か頭を下げている。ふうん、あの人でも頭を下げることもあるのか、などと妙な感慨に浸っていると、ちよいちよいと手招きされた。ついてこい、ということらしい。

二階へ上がり、ベッドが二つある部屋に通された。中々居心地の良さそうな部屋で、宿泊のための費用もそれなりなのでは無いかと思いつく。というか今日はここに泊まるつもりなのだろうか？ それなら自分を連れてきた理由は何だろう。

図書館を出たときから、胸の鼓動は朝と同じようにかなり高くなっていたが、ここに来て一気にまた上がる。

鼓膜がジンジンするほどの拍動を感じつつ、ふと女の姿を探す。いない。

緊張ではなく、動揺の為に心拍数が上がるのを感じていると、コンコンと扉をノックされた。

「両手が塞がつてるの。開けてくれない？」

女の声だ。

何時の間に階下に降りていたのだろう。扉を開けると、お湯の入った大きめなバケツとタオルを数枚、それに何かの服を持っている女の姿があつた。見かけによらず、腕力もあるらしい。

それらを目の前まで持つてくると、扉を閉めて、またニツコリ。何となく気おされていると、爆弾発言をかまされた。

「脱いで」

「は？」

「身体を拭くの。そんな格好で食堂に降りたら、迷惑になるから」

「で、でも」

「女同士で、何か恥ずかしがることあるの？」

……気づかれていたのか。何故だろう。

がつくりと頭を垂れる。その間にも女は自分が服を脱いで、手際よく絞ったタオルで身体を拭いていた。潔いほどの脱ぎっぷりだ。

白くて細身の、しなやかなスタイルを前にすると、同性とは言え何となく目のやり場に困る。その上 自分の貧相な体つきを思うと、脱ぎづらい。

しかし自分はまだ女から答えを貰っていない。ここで躊躇っている暇は無い。赤面してるのを自覚しつつ、えい、と服を脱ぎ温かいタオルで清拭して、手渡された白いＴシャツとパンツに着替えた。宿屋のものらしいが、とても着心地が良い。

自分が着替え終わるのを待っていた女は、底の見えない笑顔を見せつつ言った。

「……話は、ご飯を食べながら。ね？」

ごくりと喉が鳴ったのは、もちろん空腹のためなどでは無い。

ぶっちゃけ食欲なんて無い。お金だって無い。

だから何でも好きなものを頼むように促されても、沈黙を貫き通した。

女は苦笑しながら、適当に何品かをオーダーした。好きなものを食べられるだけ食べなさいと言われ、目の前に並んだ食べ物を見る。こんがりと焼けた鶏の丸焼き、ブイヤベース、色鮮やかな野菜のサラダ、スープ、クロワッサン……バターにジャムもついている。

こんなに豪華な食べ物を見たのは何年ぶりだろうか。

現金なもので、途端に腹がキュウと音を立てた。バツが悪くなって上目で女の様子を伺うと、思った以上にやわらかい表情でクスクスと笑っている。

「早く食べなさい。冷めちゃうでしょ」

「でも、ボクお金が」

「私が払うから気にしないで。子供が遠慮なんかするもんじゃないわ。それに、」

「食べないと、結論教えてあげないわよ。」

「イタダキマス」

……久しぶりに摂ったマトモな食事は、本当に美味しかった。

## その9

「結論から言うと、貴方を連れ歩くことは出来ないのよ」

タイミングを見計らい、コーヒーをすすりながら『魔女』      ルカ・

フォルトは言った。

子供はデザートに出てきた桃を食べていたが、唐突な言葉にピタリと動きを止めて目を見開いた。

しかしそれは一瞬のことで、すぐに落胆と諦めの表情が浮かぶ。予測はしていた、でも辛い。そんなところだろうか。

だが、この話にはまだ続きがある。

子供が桃を食べ終わるのを待ち、片手を上げて店員を呼ぶ。コーヒーのおかわりを注文し、空いた食器を片付けて、テーブルを綺麗にしてもらうと、バサリと子供の作成したレポートの束をテーブルの上に広げた。

「これ」

「そ、貴方の作ったレポート」

字が汚いから、読むの苦労したわよ。冗談めかしていいながら、それらをめくりつつサラリと言う。

「正直に言うけれども、貴方は多分、いわゆる『天才』の部類だと思っ

まさかあれだけの短期間に、字も読めなかったのにあの量の書籍を全部読んで、理解して、これだけのレポートを作るとは思ってた」

掛け値無しの賛辞に、子供の頬が真っ赤になった。面白い。

「でも、じゃあ何故？」

「だから話はきちんと最後まで聞きなさい。

私は貴方を『連れ歩くことが出来ない』とは言ったけれども、肝心

なことはまだ口にしてないわ」

やれやれ、とため息をつきながら、肩をすくめて見せた。子供の表情が驚きに変わる。

別に焦らしているつもりは無い。

ただ、その結論を口にするにあたり、改めて自分の覚悟を決めなければならなかった。そのための間が欲しかっただけで。

あ。それって結局、子供の立場から見れば時間を稼いで焦らしているってことか？ などと思ってはならない。決して。

『魔女』には『魔女』なりに……まあ、その、色々。そう、色々あるのだ。

すう　　と深呼吸して、『魔女』は告げた。

「合格よ。貴方を弟子にして、魔法を教えてあげる」  
ただし、条件付で。

目の前が、開けたような感覚だった。

それこそ、もう死んだっていい。それほどまでの幸福感と高揚感。空も飛べる気がする、とはこういう感覚のことか。

目に見えて希望に満ちた表情の子供を見て、女は苦笑したようだった。ポリポリと右手で頭をかくと、届けられたコーヒーのおかわりをグビりと口にした。

「で、その条件なんだけど、3つあるわ」

「はい、何でもします！」

「だーから、『何でもします』なんて言葉は軽はずみに言っちゃダメだっつもの。特に、これから魔法を使えるようになるなら、ね」

喜色満面に思わず身を乗り出すと、ペシッと額を叩かれた。ちよつと痛い、そんなことは気にもならない。

「さっきも言ったとおり、私には貴方を連れ歩く余裕は無いの。だから貴方には、この街に定住しといてもらわないといけない」

出来る？ と目線で問われ、無言で力強くうなずいた。頼るアテナ



ど無いが、自分は知っている。死ぬ気になれば何だつて出来る。

すると、女がまたメモを差し出してきた。最初と同じように、数冊分の本のタイトルが羅列されている。

「じゃあ、この街にいる間にここに書いてある本を読んでレポートを作成して、次に私がこの街に来るまでに完全に理解しておいて。そうね、3ヶ月後くらいには立ち寄れると思うから。」

作成したレポートは定期的に遣いをよこすから、それに託せば私の手元に届くようにするわ。

これが一つ目の条件」

「分かりました」

「あとこのレポートは返しておくわ。補足や添削入れといたから、目を通しておいて。」

あ、『力』の自覚の仕方は、この間読んだ本に書いてあったから分かるわね」

うなずくと、女がコーヒークップを皿に戻した。すうつと右手が伸びて、こちらの額に当たる。その手から、何か温かいものが身体に流れ込んでくるような感覚があった。心地よい。

目を閉じて、何事かに集中している。邪魔をしないように、でも睫毛の長さを目の当たりにして内心ドキドキと待っていると、その目がふつと開いた。

額から手が離れていくのが、名残惜しい。

「操ることの出来る力の上限は強め、でも制御は少し不得手な方。」

色はゴールド、得意分野は炎系だけど水系も不得手では無い　癒しの分野はそれなり、でも補助系にはあまり才が無さそうね」

「ちよつと触れただけで、そんなことが分かっちゃうんですか？」

「うん、まあ」

言いながら、さらにメモに何かを書き足している。

「『力』の自覚が出来たら、この本の魔法陣と呪文、全部記憶して。簡略化や省略など、もし出来たとしても一切なしよ。最初は基本的に忠実に」

覚えても、絶対に一人で使ってはダメよ。最初は制御が効かなくて危険だから、師匠である私の立会いの下でするから。

多分貴方のことだから、待てないかも知れないわね？ でももし一人で魔法を使ったりしたら クビよ。

隠れてしても分かるから、そのつもりで。これが二つ目の条件。

それまでで一番凄みのある笑顔を向けられて、背中にタラリと冷や汗が落ちるのを感じた。コクコクと首を縦に振ると、表情がふわりと緩む。仕方ない子ねと肩をすくめられた。残っていたコーヒ―を全部喉に流し込み、カップを置くとスラリと長い指を組む。

「それから、これが最後の条件なんだけど」  
あなた、一人称の『ボク』っての、辞めなさい。

## その10

「とまあ、そんなわけで現在に至るわけです」

「どんなわけよ。ていうか誰に説明してるのよ。それ以前にさつさとこの状況を打破するためにオリーブ、貴方も働きなさい」

えーめんどくさいー。という言葉はひとまずゴックン。確かにこの状況を打破するためには、師であり『魔女』でもあるルカ・フォルトだけに頼るわけにはいかないだろう。

今の自分たちの状況：樹海の中を全力疾走で逃走中。背後から魔族の群れ。

「このクソアマどもー待ちやがれ」だの「殺してやる」だの、物騒な言葉と共に乱打される魔法をかわしたり防いだりしながら、とにかく足は止めない。

ぶつぶつぶつぶつ……と、普段は呪文詠唱なしで容赦なく魔法をぶつ放す師が、珍しく長々と呪文の詠唱に集中している。これは久々に、デカイ魔法を拝めそうだ。

小さめの魔法を散発しつつ、魔族の動きを牽制する。このあたりに生息している小者魔族にそれほど知恵は無いので、複雑な波状攻撃や挟み撃ちなどをされることは無いだろう。

と、突然師匠が足を止めて振り向いた。手にした杖をドンと地面に打ち付けて、自分たちを中心とした魔法陣を発動させる。近場に満ちていた世界樹の＋エネルギーが、一気に魔法陣に集中するのが感じられた。その膨大なまでの力に、ぞわり、と鳥肌が立つ。歓喜にも似た高揚感。

光を発する魔法陣から召喚されたのは、バカみたいにカラフルで派手なデカイ鳥。ものつそい奇声を発し、自分たちを背中に乗せるとバサバサーと羽ばたき舞い上がった。ついでのように強風に押され

て、追っ手が悲鳴を上げながら吹き飛ばされてゆく。ああ、気の毒にーなどと心にも無いことを呟くと、肩をすくめられた。

「全くもー。傷つけずに追い払うつてのが、一番面倒くさいわねー」

「そんなことって、魔王に聞かれたらシバかれますよ」

「大丈夫よ、息子が庇ってくれるから。魔王も息子の言うことなら、無碍には出来ないでしょ」

「こんなお母さん持って、ルディ君ホント気の毒」

「破門するわよ」

「望むところです」

軽口叩いてる間にも、師は地図を眺めている。きっと次の目的地を考えているのだろう。

「そういえばルディ君、幾つになったんです？」

「貴方の3つ下だから、今年の秋で24歳ね。これがまた段々父親に似てきて、ホントに可愛いくてカツコイんだわー」

「……親ばか」

「何とでもいいなさい。あ、ちなみに貴方に息子はあげないから」  
ふふん、と胸を張る大人気ない師匠に苦笑しつつ思う。ということ  
は、あれからもう15年が経ったことになる。

こうして旅に同行させてもらえるようになってからは、5年。  
色々なことがあったなー。思わず遠い目になってしまう。

そう、色々。自分にとっても色々あったし、きっと師にとっても  
うだ。

何故師が旅をしているのか、まだ教えてもらってはいない。が、こ  
うして一緒に行動させてもらえるようになったのは、実を言うと嬉  
しいことだった。

つまり自分が師にとって、足手まといではなくなったということに  
他ならない。それどころか、最近ではこうして頼りにしてもらえて  
いる。

悦に浸ってニヤニヤしていると、少しずつ鳥が高度を下げている。このアタリで一旦降りるのだろう。

地面に着くと同時に、鳥が煙のように姿を消した。魔法を解除したのだろう。相変わらずスゴイなーなどと感心していると、「ところで」「と師が声をかけてきた。

「貴方結婚とかしないの？」

「王都に彼氏いますよー。遠距離恋愛」

「ええーマジでかー」

「ていうかその若者言葉、辞めて下さい」

ぶるぶる、と身震いしてみせると、師は至極残念そうな顔をしてきた。気に入ってたんかい、などと内心で突っ込みいれてると、一人で何やら「ふむ」と納得している。

「その彼氏、私に紹介しなさい。見定めてあげるわ」

「何ですか」

「一応、可愛い弟子の彼氏でしょ。貴方にふさわしいか見るのが師匠ってものよ」

そうやって今まで何人、他人の彼氏にダメ出しして別れさせてきたんだ、などと思わず突っ込みを入れて、辞めた……『可愛い弟子』、と認識されているのは本当のようなので。

今のように軽口叩き合えるような師弟関係を築けるようになるまで紆余曲折あっただけに、その部分だけは絶対に疑いの無いところだった。

それに、まあ別れたのは師のせいではないというのも確かだ。単純に自分の好みの問題や相性とか、遠距離であるが故の障害とか、相手の浮気とか。

案外そういったものを瞬間的に見抜いてるのかもなー、90%は冷やかしが目的だろうけど、と思いつつ。

「さて、ちよいと歩くわよ」

「今回は宿奮発しましよーよー」

「だーめ。金欠だから」  
「またですかー」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7336/>

---

押し掛け弟子ですが、何か？

2010年10月8日23時17分発行